

二〇三三年九月一日

痩せし腕取りてそこまで秋夕焼

たか子

芋の葉の半分程が喰はれけり

豊実

朝日勿ねダイヤモンドの草の露

むべ

広き野に牧草ロールひつじ雲

愛正

二〇三三年八月三十一日

大岩を卓に行厨いわし雲

智恵子

のんびりと垂れて糸瓜の太さかな

よし子

薄雲に透けて幽かに望の月

明日香

二〇三三年八月三〇日

なまくらな包丁を研ぐ残暑かな

ぽんこ

二〇三三年八月二十九日

牧牛の大き瞳に秋の雲

素秀

びー玉は忘れものらし夏休み

あひる

二〇三三年八月二十八日

拭きあげし廊下秋日を勿ねにけり

澄子

地下街は迷路のごとし秋暑し

たか子

巨人めく大きサンダル孫来る

あひる

二〇三三年八月二十七日

熊蟬に急かされて超ゆ山路かな

むべ

棺に入る汝れの遺愛の菊枕

みきお

水音と風も馳走や川床料理

もとこ

二〇三三年八月二十六日

乗る人もなき炎天の観覧車

智恵子

広縁に正座して聞く秋の声

せいじ

毎日句会みのる選・二〇三三年九月三日